今月の読み物

巨樹巨木シリーズ21
静岡県の巨樹・巨木２

細田木材工業株式会社
顧 問　　細 田 安 治

前月号では静岡県の広葉樹に入ったが、流石に巨樹の宝庫 静岡は、巨樹･巨木に加え、古木が数多くとてもとてもご紹介しきれるものではなかった。なので今月号でもエネルギッシュで力強いU氏の伊豆半島の足跡と、熱心な探索を追いながら筆を進める。

写真番号-1　蓮着寺のヤマモモ

樹齢1000年　根廻り7.2m　樹高15.7　枝張り東西22.5m　伊東市富戸　国指定（文化財）天然記念物

写真１　蓮着寺のヤマモモ

ヤマモモは、ヤマモモ科に属する常緑高木で､暖地の海岸近くに自生する。雌雄異株で果実は食用になり、樹皮は染料として価値が高かった。根に根粒菌*が共生するので、やせ地でもよく育つ。城ケ崎から浮山へかけてのこの一帯は、昔からヤマモモの群生地として有名である。この樹は雌木で、大きさ、姿、形ともこの地域を代表するものであり、国内全体でも最大級のものである（以上、文部省案内板より）。

このヤマモモの木は自由自在に枝を伸ばしている。樹齢1000年と称しているが、一見してまだまだ熱きエネルギーがほとばしるようだ。しかも、果実が「たわわ」に実っている。さしずめ熟年の女王の力強さを感じた。

＊根粒菌：マメ科の植物の根に共生して、根粒を形成、空気中の窒素を固定し植物に供給することで、成長に役立つ。ヤマモモはマメ科ではないが根粒菌を持つといわれている。

〈筆者のこぼれ話〉

伊東市といえば筆者にはいくつかの思い出がある馴染み深い地域だ。その一つをご紹介する。伊東から下田までの海岸沿いの急峻な崖っぷちを走る国道119号線と並んで走る伊豆急行線の路線距離は45.7km、駅の数は16駅である。

ヤマモモが群生する城ケ崎は、川奈を過ぎ大室山、小室山を右手に見れば、リアス式ジクザク地帯の険しい海岸である。伊豆急鉄道は海が迫る険しいがけっぷちを曲芸のように走っている。よくもこのよ

うな難所に鉄道を敷いたものだと幾度も思った。

偉大な先人達の驚異的な力に感謝の念を捧げ、鉄道のもつ大きな力を見抜き、この難事業を成し遂げた企業家に敬意を表し、本題とはずれるが、伊豆急鉄道施設までの歴史をご紹介する。

◇伊豆急鉄道

伊豆半島住民の悲願である鉄道敷設は、明治以来の挫折の歴史でもあった。昭和13年、国鉄の伊東までの開通に続き、下田までの延長計画はあるも凍結、その後、昭和29年には「新線建設計画慎重論」により地元住民による鉄道誘致運動は終幕となった。ところが、伊豆をこよなく愛する東急電鉄会長 五島慶太氏が立ち上がり、「なんとしても伊豆に鉄道を」と、昭和31年に伊東－下田間地方鉄道敷設免許を申請したのである。この五島氏の快挙は「第２の黒船の到来」と地元住民が一丸となり、「伊東・下田鉄道敷設促進下田同盟会」を結成し運動を展開、これが実り、遂に昭和34年鉄道敷設免許が交付された。これはまさに明治以来の悲願達成であった。

昭和35年１月22日、鉄道建設に着工、31か所にものぼる隧道工事や困難な用地買収等にもかかわらず、２年足らずで工事は竣工、昭和36年12月10日に開通を迎えることができた。鉄道開通により、伊豆半島南部の今まで埋もれていた無限の観光資源が日の目を見ることとなる、歴史を変える出来事であった。今日におけるいつ終わるとも知れない「公共工事の遅さ」と比較すると一瞬「本当かな」と思うほどの突貫工事である。

尚、伊豆急鉄道の路線距離は、45.7km 16駅、昼夜休まず働いたとしても信じられないようなスピードだ。計算はさておき、明治以来の悲願達成は実に目出度いことである。ここでの学びとしては「人間は夢に向かって進めば何事も成し遂げることができる」「何事も夢を持つべきだ」である（以上ネット資料参照）。

写真番号－2　八幡宮来宮（はちまんぐうきのみや）神社のスギ

樹齢300年以上　樹周5.97m　樹高48m　伊東市八幡野

八幡宮来宮神社は、本来現在地に鎮座していた八幡宮に来宮神社を合祀したものと伝えられるが、近代社格制度において、それぞれが郷社に指定されるという珍しい例を示している。

神社の苔むした石段を登り切ったところに参拝者を見下ろすように、「スクッ」とまっすぐに聳（そび）え立つ。樹高48mとなればマンション16階の高さ、見上げれば首が痛くなるほどで、写真では頂点まで入りきらない。

このスギはお日様の当たる東南面では艶やかな女性の優しさを見せ、西北面では、しめ縄と御幣で足元を確り引き締め、大きな絞りと苔むす皮肌は神々しく圧巻である。

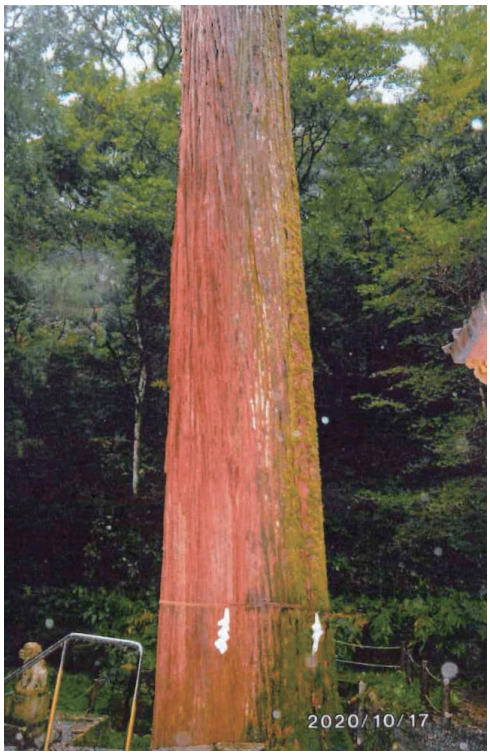

写真２　八幡宮来宮神社のスギ

写真番号-3　済広寺のカヤ

樹齢750年　樹周5.26m　樹高21m　賀茂郡伊豆町稲取　静岡県指定天然記念物

お寺の境内に立つ大きな縦書きの立て看板が目をひく。

筆者は、カヤはイチョウと似ていると感じている。しかし、カヤとイチョウは基本的分類が大きく違う。カヤは常緑針葉樹であるのに対し、イチョウは落葉広葉樹である。似ているとしたのは、そびえ立つ木の持つ雰囲気が似ているからである。筋張った木肌の色、四方八方へ伸ばされた枝の張り方、さらには長寿・巨樹が多いこと。加えて、用途が同じということだ。碁盤、将棋盤が主力商品でそのほかにも高級細工物の材料としてどちらも貴重な材料である。

済広寺のカヤの写真を見たとき一瞬イチョウの雄の木ではないかと思ったほどよく似ている。直立した幹の枝下は大きく絞られている。この絞りがこの木の特徴とみた。

写真３　済広寺のカヤ

写真番号-4　金烏山東大寺（きんうざんとうだいじ）のホルトノキ（別名チーノキ）

樹齢850年　樹周7.5m　樹高16m　賀茂郡河津町峰東大寺

ホルトノキは、総幹周＊が7.5メートルで、ホルトノキのうち日本最大とされる。伝承によれば、樹齢850年といわれ、平安時代から現存するという。ホルトノキの根元にある祠は、江戸時代に亡くなった子どものお墓と伝えられている（静岡県ホームページより）。

＊幹周：株立ちを除く地上から1.3メートルの位置（主幹）で比較している（巨樹・巨木林データベース（環境省生物多様性センターホームページ）を参照）

ホルトノキとは「ポルトガルの木」から転化したといわれ平賀源内*がオリーブの木と間違えたという逸話も残っている。葉の形がヤマモモに似ておりヤマモモと間違えられることがよくある。別名モガシ。常緑広葉樹で、樹高は10から15m、７月～８月ごろに花をつけ、果実は黒紫色（ネットを参照）。

＊平賀源内：江戸後期の草木・蘭学・医学に秀でるほか、芝居、狂言などに通じるマルチ人間、大河ドラマ「べらぼう」にも登場する著名人

写真４　金烏山東大寺のホルトノキ

写真番号５　大晦日(おおずもり)五輪の大カヤ

樹齢800年　樹周4.36　樹高20m　静岡県富士宮市内房大晦日（所有者望月旭氏の善意で自宅の敷地内が一般公開されている）　静岡県指定天然記念物

再び、カヤである。

この地駿河の国大晦日(くにおおずもり)部落は、鎌倉時代七名の侍により住居を構えたと伝えられる。当時のカヤの実は米一升、カヤ一升と言われるほど貴重品として尊重され、カヤの実からは灯油、カヤ酒、食品用として重宝された。このカヤは当時のカヤの木の一部である。カヤの根元に望月家の五輪*さん（鎌倉時代）が祀られているところから、「五輪の大カヤ」と名付けて天然記念物として指定された（案内板より）。

尚、この地には、「塩の道」の石碑があり、駿河から甲斐への重要な街道だったことがわかる。

「米一升、カヤ一升」とあるが、カヤがここまで貴重とは意外だった。

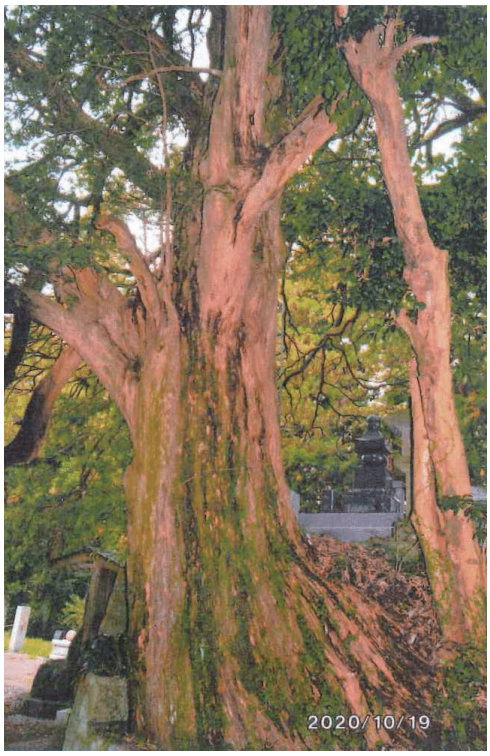

写真５　大晦日五輪の大カヤ

＊五輪：五輪塔のこと。鎌倉時代から伝わった。仏教における、地・水・風・火・空によりこの宇宙はできていると考える思想を表したもの。供養塔や墓石としてつくられたもの。続く